九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

萬葉集の「生」字について

吉川, 進

https://doi.org/10.15017/12235

出版情報：語文研究. 25, pp.54-60, 1968-03-10. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

萬葉集の「生」字について

吉川　進

一

萬葉集における中国文学の影響については早くより説かれており、多くの人々によって文学的に或いは語学的にその研究がなされている。

萬葉集の用字について小島憲之氏は「萬葉集の文字表記は文学的用字法からみて漢詩文の影響を受けたものが多く、我々の看過し易いところに萬葉人の文字表現の謎が潜んでゐた。そこに彼等の表現意識を汲み取らねばならない。しかも萬葉人は単に詩語そのままを移したと云ふだけではなく、更にそれを応用した面も多く、やはり新しい文字表現の道を拓いてゐると云へる」[注一]として、すでに多くの萬葉語に漢詩文の影響を受けたものがあることを指摘しておられる。

また当時我が国にもたらされた漢籍の中でも特に注目すべきは類書であるといわれ、その代表的なものとして、芸文類聚、文選などをあげられる。

以上のことに基づいて、ここに萬葉集の「生」字についていささか私見を述べて大方の御批判を仰ぎたいと思う。

二

まず、万葉集中に用いられている「生」字にはどんな訓みがなされているか見ると、

みさごゐるいそみに生名乗藻（おふるなのりそ）の名は告（の）らしてよ親は知るとも（三、三六二）

いさなとり浜辺を清み打靡（うちなび）き生玉（おふ）藻に朝凪に千重波寄り夕凪に五百重波寄る……（六、九三一）

水底に生玉（おふ）藻のうち靡き心は寄りて恋ふるこのころ（十一、二四八二）

磯の上に生小松（おふ）の名を惜しみ人に知らえず恋ひ渡るかも（十二、二八六一）

神さびて巌に生松が根の君が心は忘れかねつも（十二、三〇四七）

つのさはふ石見の海の言さへく唐の崎なるいくりにぞ深海松生荒磯にぞ玉藻は生流（二、一三五）

白髪生流ことは思はずをち水はかにもかくにも求めて行かむ（四、六二八）

以上の例でわかるように「生」字は、ほとんど「おふる」と訓まれている。

それでは、「生」字は「おふる」とのみ訓み、他に違った訓みが全くないかといえば、そうともいえない。

吾がみげは御塩のはやし著矣奴吾が身一つに七重花佐久八重花生跡申し賞さね申し賞さね（十六、三八八五）

右の歌に見える「生」字は、上に「七重花佐久」とあるので「八重花生」と訓まれている。

萬葉集中、この歌の例のみが「生」字を「さく」と訓んでいる唯一の例であるが、果して「生」字に「さく」という訓みがあるのであろうか。管見に入るかぎりでは、このことについて説いたものはないようである。

字書類などをみても「生」字に「さく」という訓みを与えているものはみあたらない。

そこで当時我が国にもたらされた漢籍の中でも、文選と並んで最も注目すべき芸文類聚を開くと、巻三、歳時部の梁簡文帝、春日看梅詩に、

昨日看梅樹　新花已自生。
今日聞春鳥　何啼両三声
凍解池開緑　雲穿天半晴
遊心不応動　為此欲逢迎

というのがある。この詩の「新花已自生。」は新しい花が咲いた。（開いた）意であることはまちがいないであろう。

つまり漢籍において「生」字を花が咲く意に用いているのである。

これによって萬葉人は「生」字に「さく」という訓みを与えて用いたのであろう。

三

そこで次に「生」字の訓みに疑いのあるものについて見ていくことにする。

をみなへし生沢辺之ま田葛原何時かも繰りて我が衣に着む（七、一三四六）

この歌は「をみなへし咲き」と地名の「佐紀」とをかけており萬葉集古義が「生沢辺之はサキサハノベノと訓べし（これを古来オフルサハヘノとよみたれども、ひがことなり、こは己がはじめて考へ得たるよみなり）生を、サクと訓ム例は、六ノ巻に、春者生管、十六に、八重花生跡、などあるが如し（又十ノ巻に石走間々生有貝花乃、とあるをも、マヽニサキタルカホバナノともよむべし）さてこそ姫押は、さくと云にかゝれる枕詞には

ありけれ」と改めてより、井上氏新考、全釈、総釈、佐竹・木下・小島三氏萬葉集など「生沢辺之」を「さきさはのべの」と訓んでいるが、全注釈、古典大系本は、地名の「佐紀沢（さきさは）」と解するは誤りとする。

なぜなら「紀」はキ乙類であり、動詞「咲く」の連用形「咲き」の「き」はキ甲類だから上代特殊仮名遣いに抵触するとして「おふるさはべの」とよんでいる。これと同じく、

をみなへし咲沢におふる花かつみかつても知らぬ恋もするかも（四、六七五）

の歌についても「咲き」と「佐紀」を掛詞にするのは誤りとして「さくさは」と訓んでいる。

このような「女郎花の咲く沢」の意とする全注釈、古典大系本の説に対して、萬葉集注釈は「女郎花が沢に咲くといふ事もをかしく『垣津旗開沼之菅乎』（十一、二八一八）の如きもサキヌと訓むべきものと思はれ、『かきつばた』は枕詞と見るべきものであり『姫部思咲野乎生白管自』（十、一九〇五）の如きも女郎花とつゝじとは季節を異にしたものである事を考へても前者は枕詞である事が認められ、既に代匠記に『咲沢ハ所ノ名、娘子部四ハ咲ト云ハン料ナリ』といひ『大和国添下郡ノ佐紀ナルベキニヤ』とあるに従ふべきだと考へる。たゞ仮名違ひが疑問のやうであるが言葉のしやれは現在でも類似音を用ゐる事が常であるやうに、必ずしも正確に同音をかけるものとは考へられず、前に『あさもよし紀』（一、五五）の場合に述べたやうに、特にキの甲乙二音がかけ言葉になったと思はれる例がいくつもあるので、今も同様の例と認めるべきだと私は考へる。[注三]」と述べて、二例共「さきさは」と訓んでいる。

やはりここでは、上代特殊仮名遣いを絶対的なものとするよりも、注釈の説のように解すべきであろう。

四

そこで前に引用した古義の説に見られる歌を検討していくことにする。

大伴坂上郎女宴親族歌一首

かくしつつ遊び飲みこそ草木尚春者生管秋は散りゆく（六、九九五）

の「生管」は、旧訓「もえつつ」と訓んでいたが、古義が「さきつつ」、略解が「おひつつ」と訓んでいる。これについて井上氏新考が「さきつつ」と訓んでいるだけで、大成、総釈、古典大系本、佐竹・木下・小島三氏萬葉集、注釈など最近は皆、略解の「おひつつ」を取っている。全注釈は「生は訓の多い字であるが、春の草木については、モユが適している。草木の春生秋落を述べたのは、人生無常、時致れば死ぬの意である。」とのべて「モエツツ」と訓んでいる。

「おひつつ」と訓むことについては総釈が「舊訓のモエは論外として、古義のサキ説も必ずしも不可ではないが『草木スラ』といふ語に対してサキよりもオヒの方が妥当のやうに思はれる。草木でも春は生々と生ひ茂り栄える、といふ意味である。」と述べている。

つまり「草木」とあるので「おひつつ」の方が妥当だというのであるが、大伴家持の歌に次のような例がある。

言問はぬ木尚春開秋づけばもみち散らくは常を無みこそ（十九、四一六一）

これを見ると「木尚春開」とあり「木」に対して「開」という表現をしているのである。（開の字を「さく」と訓むことはまちがいないと思う）。又

時ごとにいやめずらしく八千種に草木花左伎鳴く鳥の声も変らふ……（十九、四一六六）

という例もあるのである。

故に家持の作歌に多大の影響を与えた叔母の坂上郎女の歌も「さきつつ」とよめることになり、さらに「春はおひつつ秋は散りゆく」というよりも「春はさきつつ秋は散りゆく」といったほうがよりすぐれており、古義の訓みの鋭さに改めて感ずるしだいである。

石橋の間間に生有貝花の花にしありけりありつつ見れば（十、二二八八）

古義は前に「マヽニサキタルカホバナノともよむべし」と述べていたが、実際にこの歌の所では「間間生有は、マヽニオヒタルと訓べし、又アハヒニサケルともよむべきか」としている。

さきに「春者生管」（六、九九五）生沢辺之」（七、一三四六）という卓見を示した鹿持雅澄も、ここでは先がにぶっているようである。以後の注釈書も「ままにおひたる」と無難な訓みを取り、石と石との間に生えている顔花の意としている。

但し「おひたる」と訓んではいるが、「崖に咲く貌花のように、空しい美しさなのであった。ずっと引きづいて見ていると」（古典大系本）と解されているように、やはり咲いていると

いう気持がそれとなく現われている。顔花が美しく咲いていることであるということはよくわかるのであるが「生」字にどうしても「さく」という訓みを与えることができず「生有」を「おひたる」とよんでいるのである。

しかし「生」字を「さく」と訓めることがわかった今では、何らためらうことなく、

石橋の間間にさきたる顔花の花にしありけりありつつ見れば

と訓んでさしつかえないのである。

そもそも美しく咲いている花を見て、おひたる花、などということ自体無理なことである。

このように見てくると「生」字を「さく」と訓んでよい歌、又「さく」と訓んだほうがより適当な歌がこのほかにもあるのではないだろうか。

五

磯の上に生流馬酔木を手折らめど見すべき君がありと言はなくに（二、一六六）

この歌は

移葬大津皇子屍於葛城二上山之時大来皇女哀傷御作歌二首

とあるうちの一首であるが、

右一首、今案不似移葬之歌、蓋疑従伊勢神宮還京之時路上見花感傷哀咽作此歌乎

という左注がついている。（但しこれは編者の誤った注とされている。）

右の歌について考えるまえに、まず集中の馬酔木を詠んだ歌を見ると、

吾が背子に吾が恋ふらくは奥山の馬酔木の花の今盛りなり（十、一九〇三）

うちなびく草香の山を夕暮にわが越え来れば山も狭に咲有馬酔木の……（八、一四二八）

三諸は人の守る山本辺は馬酔木花開末辺は椿花開……（十三、三二二二）

磯影の見ゆる池水照るまでに咲ける馬酔木の散らまく惜しも（二十、四五一三）

池水に影さへ見えて咲きにほふ馬酔木の花を袖に扱入れな（二十、四五一二）

以上の例でわかるように、馬酔木を詠んだ歌は、すべて咲いている花を詠んでいる。

萬葉人は、馬酔木の花が咲き乱れている情景を見て、このような歌を詠んだのであり、咲き乱れている馬酔木に向って「おふる馬酔木」などという表現は、歌として体をなさないことは云うまでもない。

たゞこの巻二の歌のみが「生」字を用いているため「おふるあしびを」と今まで訓まれてきている。

しかし左注それ自体はまちがっているが「路上見花」とあり、手折って見せたい気持を起させるのは、やはり咲き乱れているあしびの花であろう。

そこでこの「生流馬酔木」は「さけるあしび」と訓むのではないだろうか。

このように見てくると、今まで「生」字を「おふる」と訓み何ら疑いを入れなかったものについて考えなおす必要があるように思われる。

をみなへし咲野に生白つつじ知らぬ事もち言はれし吾が背（十、一九〇五）

この歌も「さき野におふる白つつじ」とよむのではなくて「さき野にさける白つつじ」とよむ方が「さき野にさける」と「さ」の音を並べ、次に「しらつつじしらぬこともち」と「しら」の音をかけて用い、音調を合せて巧みに歌いあげているのである。そこに作者の意識的なものがよくうかがえる。

「さき野におふる白つつじ」ではどうも歌として受ける感じがだいぶ違ってくる。やはり白つつじが美しく咲いているという意識のもとに、序詞として用いたものと思われる。

さらに前にも引いた

をみなへし咲沢に生流花かつみかつても知らぬ恋もするかも（四、六七五）

についても「さきさはにさける」と「さ」の音を合せ、さらに「花かつみかつても知らぬ」と「かつ」の音を合せているのである。故にこの歌も「さき沢にさける花かつみ」と訓むべきで「さき沢におふる花かつみ」などとは訓めないのである。

詠山振花歌一首

繁山の谷辺に生流山吹をやどに引き植えて朝露ににほへる花を見る毎に思ひは止まず恋し繁しも（十九、四一八五）

この歌も題詞にあるように、やまぶきの花を詠んでいるのであり、又歌の中にも「朝露ににほへる花」ともあるところより、「しげ山の谷辺にさけるやまぶきを」と訓んでさしつかえないと思われる。むしろ「谷べにおふるやまぶきを」とよむのが何となく意にそぐわないように感じられる。

やまぶきの花を詠んだ歌は、

山吹の咲きたる野辺のつぼすみれこの春の雨に盛りなりけり（八、一四四四）

山吹は日に日に咲きぬ愛はしと吾が思ふ君はしくしく思ほゆ（十七、三九七四）

わが背子が屋戸の山吹咲きてあらば止まず通はむ いや毎年に（二十、四三〇三）

山吹の花の盛りにかくの如君を見まくは千年にもがも（二十、四三〇四）

などと多く見られる。

さらに山部赤人のあまりにも有名な歌である、

ぬばたまの夜のふけゆけば久木生留清き河原に千鳥しば鳴く（六、九二五）

について考えると、この歌は「ひさぎおふる」と全く定訓化している。

そこでまず万葉集に見える「ひさぎ」の歌を上げると

度会の大川の辺の若歴木わが久ならば妹恋ひむかも（十二、三一二七）

浪の間ゆ見ゆる小島の浜久木久しくなりぬ君に逢はずして（十一、二七五三）

去年咲きし久木今開いたづらに土にや落ちむ見る人なしに（十、一八六三）

以上の三例が見られる。

「ひさぎ」がいかなるものか諸説紛々として定まるところを知らぬが、ここでは、ひさぎについてせんさくすることはしばらくおくとして、とにかく「去年咲きし久木今開」（十、一八六三）とあり、ひさぎの花を詠んだ歌があるのである。とすれば、萬葉人は、ひさぎの花が美しく咲いているのを見て歌を作ったことがわかる。むしろ前述の如く、馬酔木、山吹、などと同じく、ひさぎを詠む時も生えている情景を詠むのではなく、やはりその花を見て感ずる所を表出したものであろう。

そこで山部赤人は、

ぬばたまの夜のふけゆけばひさぎおふる清き河原に千鳥しば鳴く

と詠んだのではなく、

ぬばたまの夜のふけゆけばひさぎさける清き河原に千鳥しば鳴く

と詠んだのであろう。その方が歌の感じとして数等すぐれてい

るように思う。

つまり「ひさぎがはえている」というのと「ひさぎがさいている」というのとの違いであるが、よくよくこの歌を味わうとやはり、ひさぎが河原一面に美しい花をつけていると見た方が感じとしてすばらしいものがある。

六

萬葉集に見える「生」字は、今まで普通「おふる」と訓み「さく」とどうしても訓まなければならないものを例外的に「さく」と訓んできた。

そして「生」字を「おふる」と訓めるが、「さく」と訓んだほうがより適当な場合にも「生」字にひかれてむりに「おふる」と訓んできたのである。

しかし以上見てきたように「生」字を「さく」と訓めることは、確かなことであり、萬葉集における文字表記を考えた場合「さく」と訓んだほうが適当な歌は「さく」とよみ改めるべきではないだろうか。

さらに「生」字を花が咲く意に用いたのは萬葉集独持のものではなく、当時我が国にもたらされた漢籍の影響によるものであろう。

注一、萬葉集大成　七巻

「萬葉集と中国文学との交流」三一四頁

注二、「著矣奴」は「おいてはぬ」「おいたるやっこ」など訓みに異同がある。

注三、澤瀉久孝「萬葉集注釈」巻四、四五二頁

第二十四号正誤表

頁	段	行	誤	正
3	上	13	今昔物語等四ノ一三	今昔物語集四ノ一三
5	下	8	文末のに	文末に
6	上	14	となむ語り伝へたる」（6頁上21、7頁上11、7頁下1以上同じ）	とぞいひ伝へたる」
6	上	18	繁密に	緊密に
7	上	7	になるであろう	になるであらう
9	上	18	八十一話	八十二話
〃	〃	〃	六十五話	六十四話
12	上	22	恨歌	長恨歌
13	上	1	「支」・「支」（14頁上16、14頁上24以上同じ）	「支」・「攴」
19	上	11	「志」を「キ」	「支」を「キ」
20	下	17	日本書記	日本書紀
22	下	10	よろず	よろづ
25	上	24	兵法の道、	兵法の道
〃	下	9	身をただして	身をただしく
31	上	6	ということ	という意
32	上	13	武蔵のころに	武蔵のころの
33	上	23	ものばかりである。	ものばかりである。
34	上	5	二・三月	二、三月
37	上	5	執筆有り。	執筆有り。
39	上	9	色々遣申……候て	（色々）遣ヒ……候
40	上	4	弥宜	祢宜